

小特集②

「スールー王国軍」のマレーシア・サバ州上陸事件

2013年2月中旬、マレーシア東部サバ州に、「スールー王国軍」を名乗る武装したフィリピン人数百人が不法上陸し、サバ州を「我らの土地」として領有権を主張、治安部隊との銃撃戦に発展した。事件の背景として、フィリピン政府とモロ・イスラム解放戦線（MILF）との間で合意された和平枠組みへの不満が指摘されているが、情報は断片的だ。ここでは、事件が起こったサバ州の成り立ちと事件の経過を概観し、マレーシア語紙から見える事件の余波をまとめる。

1. 背景：サバ州の成り立ち

サバ州は、マレーシアのボルネオ島北東部に位置し、フィリピン南部の島々とは船で1時間程度の距離にある。18～19世紀には、現フィリピン南西部のスールー諸島（地図ではスル諸島）、現インドネシアのスラウェシ島北西岸と交易網でつながる経済圏を形成し、スールー王国とブルネイ王国の二重支配下にあった。スールー王国は15世紀頃に成立したイスラム王国で、19世紀半ば以降は衰退し、1898年に米領フィリピンに併合された。サバ（当時は北ボルネオ）は、19世紀末に英国がブルネイ王国とスールー王国から「購入」（フィリピンは「租借」と主張）して植民地に編入し、1963年には住民調査を経てマレーシアの一州、すなわちサバ州として独立した（産経2/20ほか）。

マレーシアのイスラム教徒は人口の約6割強で、対するサバ州のイスラム教徒は州人口約320万人のうち約65%である。一見すると半島部マレーシアとほぼ同率のイスラム教徒人口を抱えているように映るが、マレーシアでイスラム教徒の9割以上を占めるマレー人は、サバ州人口の約6%に過ぎず、半島部と大きく異なる民族構成を示している。サバ州には複数の少数民族が存在するほか、独立後はインドネシアやフィリピンからの出稼ぎ労働者を積極的に受け入れており、2010年時点で約89万人（州人口の約28%）がこれら外国人である^[1]。うちフィリピン人住民は約30万人とされるが、その多くはフィリピン南部ミンダナオ地域出身



のイスラム教徒だ。出稼ぎ外国人のマレーシア国籍取得が比較的容易であること、海を通じて出入りする不法滞在者が多いことから、サバ州におけるフィリピン系／フィリピン人住民の実数はさらに大きいと見られる（産経 3/13 ほか）。

2. 事件の経過：上陸から掃討作戦まで

「スールー王国軍」と名乗る集団は、2月14日までにサバ州東海岸に上陸、海沿いの村に立てこもった。集団は、総勢80人とも400人とも言われ、一部が武装していた。「王国軍」を派遣したスールー王国「末裔」のジャマルル・キラム氏はマニラで会見し、派遣の目的は「戦うことではない。歴史的に有するサバの領有権の行使だ」と述べたという（産経 2/20 ほか）。マレーシア政府は当初、「平和的に退去させる」（朝日 2/15）とし、村を包囲した治安部隊による説得が行われていた。しかし3月1日以降、銃撃戦が散発し、武装集団19人、治安部隊の8人が死亡。同5日には、「これ以上国家の主権が侵されることは許されない」（毎日 3/6 ほか）として陸海空軍による掃討作戦を開始し、12日までに武装集団54人、10代の少年1人を含む少なくとも63人が死亡した。約100人が森や民家に逃げ込んだとも言われるが、報道は途絶えている（産経 3/13 ほか）。

フィリピン政府は武力行使を避けるようマレーシア政府に働きかけ、武装集団にも退去勧告をしていた（東京 3/6 ほか）。背景には、事態が悪化すれば国内のイスラム教徒住民や武装勢力の反発を招き、前進し始めた和平交渉に影響を及ぼすとの懸念があった（産経 2/28 ほか）。5日に開始された掃討作戦に対しては、マニラのマレーシア大使館前で平和的解決を求めるイスラム教徒のデモが起きている（読売 3/6）。

3. 「スールー王国軍」の主張と狙い：サバ州領有権とミンダナオ和平

上陸事件の背景としては、2012年10月にフィリピン政府とMILFが合意した和平枠組みで「スールーが無視されている」ことへの不満が指摘されている（朝日 3/5）。では、これがなぜサバ州上陸と領有権の主張につながったのか。「スールー王国の末裔」を名乗るのは、ミンダナオのイスラム教徒のなかでも、和平枠組みで言及されない人々、つまり非主流の人々である。「王国軍」は、サバ州をフィリピン領とした上で、ミンダナオ和平枠組みに含めることを要求したとされており（産経 2/20 ほか）、上陸と領有権の主張は、和平交渉の主体であるフィリピン政府と、仲介者であるマレーシア政府に対し、不満や待遇改善を訴える手だてだったと理解できる（産経 3/19）。

しかし、マレーシア政府、MILFは「王国軍」の行動とミンダナオ和平を「無関係」としており、掃討作戦によって交渉の可能性が排除された現在、事件が和平枠組みに与える影響は不透明だ（Utusan 3/6_[2] ほか）。ちなみに、「スールー王国軍」の領有権の主張は、1960年代のフィリピン政府と同様のものだが、その後マレーシアとの関係強化を優先して主張は棚上げされていた（日経 3/6）。フィリピン政府は事件後、サバ州を公文書でマレーシア領と表記しないよう通達するなど、改めて領有権への立場を示しているが、主張が外交問題として再燃するかどうかは不明である（朝日 3/28 ほか）。

4. 余波：マレーシア紙「ウツサン・マレーシア (Utusan Malaysia)」より

マレーシアのナジブ首相は、上陸発覚後、声明で「彼らはここ（サバ州）に親族がいる」「侵入者はテロリストではない」と述べた (Utusan2/14^[3])。政府が交渉による解決を目指していた理由のひとつに、サバ州の住民と「スルー王国軍」の民族的・社会的近さが挙げられる。サバ州には、フィリピン南部出身者が多いだけでなく、「スルー王国軍」と民族的に同一の原住民「スルック人」が居住しており、スルー諸島の住民と親族関係にある者も珍しくない。それだけに、「王国軍」が武装して上陸し、戦闘に発展したことは、サバ社会に大きなインパクトをもたらした。政府が集団を「スルーのテロリスト」と断定して掃討作戦に踏み切った後、スルック人団体は「スルー王国のスルタンを奉じていない」「サバは特定の民族のものではない」との声明を繰り返し発表した (Utusan3/10^[4] ほか)。また掃討作戦の報を受けて少なくとも 5000 人のフィリピン人住民が国外脱出するなど、「王国軍」に近いとされる人々が苦しい立場におかれていると推察される (Utusan3/31^[5])。さらに事件捜査の過程で、武装集団を幫助したとしてフィリピン人住民ら 97 人が逮捕されており (産経 3/13)、フィリピンのメディアは人道上的問題も指摘しているという (Utusan3/12^[6] ほか)。マレーシア側の報道を見る限り、国内のイスラム教徒の同情や共感は、「王国軍」よりも銃撃戦で亡くなった治安部隊員やその家族に向けられていた。他方、サバ州のイスラム教徒のうち、フィリピンやスルー諸島とのつながりをもつ人々が、その他の住民や治安部隊と対峙する結果になったことが、これまでのサバ州の地域社会のあり方に及ぼした影響は小さくないと思われる。和平交渉や領有権問題の今後と合わせ、これまで社会の構成員とみなされてきた人々に対する処遇の変化や偏見という側面でも事件の影響を検討していく必要がある。

【文責：光成歩】

註

[1] 以上、マレーシア政府統計局 2010 年人口センサスより http://www.statistics.gov.my/portal/download-Population/files/census2010/Taburan_Penduduk_dan_Ciri-ciri_Asas_Demografi.pdf

[2] http://www.utusan.com.my/utusan/Dalam_Negeri/20130306/dn_45/MILF-tidak-mahu-terlibat-konfrontasi-di-Sabah---Murad (閲覧日 2013/5/15)

[3] http://www.utusan.com.my/utusan/Dalam_Negeri/20130214/dn_12/Keadaan-di-Lahad-Datu-terkawal,-kerajaan-pilih-berunding---PM (閲覧日 2013/5/15)

[4] http://www.utusan.com.my/utusan/Rencana/20130310/re_03/Suluk-Sabah-bukan-Sulu (閲覧日 2013/5/15)

[5] http://www.utusan.com.my/utusan/Luar_Negara/20130331/lu_05/5000-warga-Filipina-lari-dari-Sabah (閲覧日 2013/5/15)

[6] http://www.utusan.com.my/utusan/Dalam_Negeri/20130312/dn_31/Malaysia-sentiasa-pantau-laporan-media-Filipina---Zahid (閲覧日 2013/5/15)